

出版編集室より
「紙の本」づくり

白石 恵理

日文研の出版活動

日文研には出版編集室がある。芝生が広がる「回廊の庭」に面した一室で、野鳥の声を聞き、四季折々の風や光を背に受けながら、ほとんどの時間を文字と共に過ごしている。仕事は大きく分けて、「作る」と「届ける」ことの二つ。論文原稿を整理・編集・校正し、印刷会社の協力を得て印刷・製本後に刊行する（＝作る）。そして出来上がった本を、国内および世界各国へ発送する（＝届ける）。もちろんその過程には、出版編集室の三名のスタッフに加え、編集責任者となる先生方、執筆者、外部のデザイナーや翻訳者、所内の財務・総務・広報担当スタッフなど多くの人々の協力が欠かせない。編集・校正は時に孤独な作業を伴うが、一冊の本を期限内に仕上げるには効率のよいチームワークが鍵となる。

出版編集室が制作を担当する出版物には、定期刊行物として『日本研究』（年二回発行、日本語）と *Japan Review*（原

則年一回発行、英語）の二誌がある。いずれも、日本研究に関する公募原稿を専門家による査読を経て掲載する学術論文誌である。他に、「日文研叢書」、「*Nichibunken Monograph*」（英文単著）シリーズ、研究協力課と連携して制作している国際研究集会や海外シンポジウムの報告書、『世界の日本研究』等を合わせ、年平均一五冊ほどを刊行している。また、共同研究成果を商業出版する際のサポートや、日本語の基礎文献を世界各国の言語に翻訳し出版する活動への協力（「日文研翻訳出版協力プロジェクト」）も行っている。

すべて非売品である日文研発行の新刊は、毎年、前半と後半の二回に分けて、国内一、〇〇〇件と海外（アジア、ヨーロッパ、北米、南米、アフリカ、オセアニア）一、五〇〇件の合計二、五〇〇件、年間のべ五、〇〇〇件の大学図書館・研究機関・個人に寄贈される。それ以外にも特定の出版物のバックナンバー入手を希望する機関や研究者に対しては、在庫事情が許す限り、日に数件ずつ個別に送付している。

日文研出版物の特色と傾向

日本の歴史や文化に関わる内容であれば、ほとんどの研究分野・テーマを懐深く受け入れる日文研らしく、本のタイト

ルや掲載論文の研究対象はバラエティーに富んでいる。「植民地」「帝国日本」「近代の超克」「概念と知の再編成」「東洋意識」等の言葉が近年のタイトルに目立つ一方、例えば、『日本研究』や *Japan Review* には、一般に「メディア文化」「大衆文化」と称される映画・テレビ・マンガ・アニメ・ネット等をテーマとする論文投稿が増えつつある。また、テーマとは別に投稿者の内訳をみると、中国・台湾・韓国等を中心としたアジア圏からの応募が非常に活発である。これは京都を訪れる外国人観光客や日文研の外国人研究員全体に占める最近の比率とも合致する。

ここ五年ほどの流れとして、日文研の出版物は多言語化の傾向をますます強めている。日英はもちろんのこと、中国語（簡体字・繁体字）・ハングル・フランス語に加え、論文中文献にはドイツ語やロシア語、ポルトガル語なども登場する。また *Japan Review* や *Nichibunken Monograph* シリーズなど、英文図書の刊行が常となり、日英両方の編集・校正能力が当然求められるようになった。マルチ言語掲載の動きに今後どのように対応していくか、その編集体制作りが近い将来の課題となるだろう。

その他、特筆すべきこととして、*Nichibunken Mono-*

graph シリーズを海外の大学出版会や商業出版社と共同出版する機会が増えている。国によって契約方法や経理システムが異なるため、財務担当スタッフには多大な苦勞を強いており、手続きや評価の点に課題は残る。しかし、一冊の本を国の違いを超えて共同編集するプロセスは刺激的で、各国の出版事情を知る好機でもあり、出版というチャンネルから新たな交流を促進する大切な営みだと考えている。

これからの本づくり

創設以来、「紙の本」という新しい呼び名が定着した印刷冊子体を一貫して制作・発行し続けてきた日文研はいま、電子化の潮流への対応を迫られている。昨年、ホームページのリニューアルに合わせ、全出版物のうち、著作権者の許可を得た論文についてはすべてPDFを公開し、電子書籍形式での閲覧も可能にした。特に欧米の研究者から電子公開は好評を得ている。一方、印刷媒体を根強く望む大学図書館や研究者も少なくない。

ここ数年、所内でも、「紙」と「電子」をめぐる議論が沸騰しているが、個人的には、「紙」か「電子」かの二項対立ではなく、「紙」も「電子」もの共存を上手に図る工夫が必

要だと考えている。社会の動きを見ても、どちらかに特化する事態にならないのではないか。これまで発行してきた出版物をいま一度、シリーズごとに一冊ずつ、その内容を丁寧に見直し、「紙」と「電子」とどちらの媒体がより相応しいかを吟味した上で、今後の適正な印刷部数を検討する段階にきていると思う。

本づくりは、手間と時間とコストがかかる贅沢な作業である。だからこそ、これからの印刷物は、数量としてはある程

度淘汰される一方で、その企画内容や装丁・デザインにはこれまで以上の充実が求められるだろう。

夏の雲消しても残る紙の本

(国際日本文化研究センター)

資料課 出版編集プロジェクト員